

格差社会に抗う

—— 貧困の現場から

<第4回>

労住医連では、各地の医療機関で、貧困や差別と闘う人びとへの医療実践を共に積み重ねてきました。本企画では、激動の経済状況の中で、今、「貧困の現場」がどうなっているのかを報告いただき、私たち労住医連が行っていきべき医療実践を考えていきたいと思えます。投稿も歓迎です。皆様のご意見をお待ちしております。(編集部)

高齢の路上生活者、その問題解決の方向は

ホームレス状態から地域生活への支援ハウス ひと粒の麦の家事務局
新宿連絡会・医療班 看護師
金沢 さだ子

1. はじめに

東京の路上生活者問題が私たちの社会に登場して20年、未だに解決の出口が見えない。これは、それほど困難で解決不能な問題なのだろうか。

1997年をピークに、その後は、数の上では減少傾向となってきた路上生活者数は、今般の不況と雇用情勢の悪化によって、再び増加傾向を示すことになった。そして2009年、新宿区内の炊き出しには、常時500名以上の人々が並び、長年支援活動をしている支援者達が危機感を持つほどである。路上生活の人は、若い人から中年までその年齢層は広いが、中でも60歳以上の高齢者の姿が以前に増して目につくという印象がある。

2009年2月、新宿連絡会が炊き出しに並んでいる人を対象に年齢聞き取り調査を行った。過去の同調査と比較すると、平均

年齢は、1996年の52.4歳から2009年の54.1歳と上昇していた。そして、32.5%が60歳以上の高齢者であった。

2. 高齢路上生活者と施設の処遇

路上生活者は、生活保護制度利用までに、高いハードルがあるといわれるが、労働の過程を過ぎた高齢者の場合、生活保護を受けるにあたって、稼働年齢層の場合のような難しさは無い。それなのに何故、相当数の高齢者がいまだに路上に存在しているのだろうか。考えられる理由はいくつかある。

1. 生活保護を申請した場合のほとんどは、簡易宿所や宿泊所、あるいは更生施設といった「施設的な処遇」による生活の場が用意される。
2. その多くは、個室ではなく集団生活であり、環境的な不自由さをもっている。
3. 施設で彼らは、何ヶ月、あるいは何年

間かを過ごし、その間、福祉事務所では、「居宅生活が可能かどうか」「仕事をやる意思があるかどうか」を判断する。

4. 集団生活や不自由な環境に耐え、その壁を乗り越えられた人だけが、アパート生活を手に入れることができる。
5. 乗り越えられない人は、「施設的な処遇」の中に継続的に居るか、嫌になって出ていくしかない。

高齢路上生活者のある一定の人たちは、施設の中で年齢を重ね、そのうち要介護状態になり、アパート生活が困難になってしまうか、路上と施設との往復を繰り返す、あるいは、施設を嫌う人たちは、最初から制度に近づかないといった傾向が見られる。

緊急一時的滞在であるはずの簡易宿所や宿泊所に、なぜ高齢者が長く留め置かれるのか。原因として、以下のような問題が考えられる。

1. 地域でアパート生活をするための支援体制が弱い。結果として、その前段階の施設滞在を長引かせている。
2. 医療もしくは、生活支援が必要な要介護状態の人には、長期の生活にふさわしい居住環境や支援体制が必要であるが、その整備が不十分である。

1. の地域生活が可能で、2. の日常生活に支援が必要な人とは、その課題が異なるにも関わらず、渾然一体となり、解決の方向性が見えにくくなっている。見えにくい中で、解決に向けた力が弱いと、地域で生活をするべき人に、「居宅生活が可能かどうか判断する」という名目で、長期間、

無用な試練を与え、問題の根本的解決が遅れることになる。

3. 昨今の新たな展開と高齢路上生活者

路上生活者問題が明らかになって20年、解決がつかないまま、彼らは路上に滞在し高齢化が進んだ。かつて施設的な処遇の対象は稼動年齢層であった。しかし、今では、稼動年齢の人も、高齢者も処遇方針は同じである。更に、新たな展開によって解決の糸口はさらに見えにくくなっている。

昨今、不況の危機感の中で、国や自治体によって何兆円もの財源が投入され、雇用環境の改善に向けた様々な取り組みが起きている。その中には住居や仕事を失った人たちも対象になっているが、取り組みの中に「施設的な処遇」は見当たらない。住居や仕事を失った人の住まいと雇用の確保をめぐる新たな施策の登場、それ自体は悪くない。しかし、課題が多様化し、路上生活者問題の解決の道筋がぼやけてきていることも事実である。

4. おわりに

路上生活者問題のように15年以上の歳月を経てもなお、解決の糸口を見出せない社会は、それ自体が乗り越えるべき大きな課題を抱えている。なかでも、高齢者が路上生活を余儀なくされている状況は、社会の品格を下げることでもある。路上生活という最も貧しい人たちが、つましくても小さな屋根の下で暮らすくらい力を私たちの社会は、持っているはずである。